PRESS RELEASE

ARTS for the future!

Tama Art University

自分の生きた証として何を残すのか。私は最終的には芸術しかないと感じるのです。

寺田小太郎
いのちの記録

コレクションよ、永遠に

展覧会名	寺田小太郎 いのちの記録 ーコレクションよ、永遠に【後編】「継承」
会期	2021 年 10 月 2 日（土）～ 11 月 21 日（日）
主催	多摩美術大学美術館
出品協力	東京オペラシティ アートギャラリー、府中市美術館、早稲田大学 會津八一記念博物館
場所	〒 206-0033 東京都多摩市落合 1-33-1
交通	多摩センター駅 徒歩 7 分（京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール）
開館時間	10:00 ～ 17:00（入館は 16:30 まで）
休館日	火曜日
入館料	一般 300 円 (200 円) ※（　）は 20 名以上の団体料金 ※障がい者および付添者、学生以下は無料
公式サイト	https://museum.tamabi.ac.jp
Twitter	https://twitter.com/tamabi_museum
Youtube	https://www.youtube.com/channel/UCOvu6kaJ1sP0QXut4RBKr7g

2021 年 10/2（土）→ 11/21（日）　多摩美術大学美術館 ―――――― 後編「継承」

企画趣意

2019 年度、多摩美術大学美術館は故・寺田小太郎氏（1927–2018）より 59 点の美術作品を受贈いたしました。これを記念し、展覧会を開催いたします。
東京オペラシティビル（西新宿）地権者の一人であった寺田氏は、新国立劇場建設に伴う都市開発プロジェクトに参画し、美術館創設を目指して大きな推進力となりました。寺田氏が夢見た美術館のために収集された作品は、現在の東京オペラシティ アートギャラリーで「寺田コレクション」として公開され、都市における芸術文化の振興と発展に大きく貢献しています。全国各地の美術館にも寄贈された寺田コレクションは、現在総数約 4,500 点に上り、難波田龍起・史男の国内屈指となる作品群として知られるほか、戦後日本美術から日韓現代アートに至るまで幅広い年代・ジャンルにわたります。

前編 / 後編の 2 期にわたる本展では、当館収蔵品を含む約 190 点の作品群と資料から、寺田氏の思いに寄り添いその人物像を浮かび上がらせるとともに、寺田コレクションに込められた「物語（ナラティブ）」をひもときます。また寺田氏が長年携わった「造園」の仕事にも光を当て、そこで育まれた自然観・美的感性と収集活動との相関について探っていきます。

後編「継承」

寺田は「芸術には人を変容させる」力があるという信念を持って収集活動を行い、作品やアーティストとの出会いとともに自らの思考を深化させていきます。そして寺田は収集活動を「創造的な営み」と考え、そのプロセスを通じて自分の想いを表現しようと試み、自らが生きた証となるコレクションを未来へ伝えようとしました。本展【後編】では、寺田から私たちへ受け継ぐメッセージを「人間とは何か」「幻想美術」「自然の声」「センス・オブ・ワンダー」というテーマに込めて構成し、寺田のまなざしの先にある未来へ想いを馳せていきます。

寺田小太郎プロフィール

1. 相笠昌義
《トップルームの寺田さん》1999 年

寺田小太郎（Kotaro Terada）

1927（昭和 2）年 5 月 7 日、滋賀近江の商人を出自とし、江戸に移って約 500 年続く寺田家の長男として生まれる。

東京農業大学緑地土木科（現造園科学科）および同大学農学部農業経済学科出身。1963 年から東京農業大学の恩師・中島健（1914-2000）の誘いを受けて綜合庭園研究室に勤務し、造園の仕事に携わる。造園の仕事は寺田にとって「天職」となった。1980 年に綜合庭園研究室から独立し、創造園事務所を設立。中島とともに東京オペラシティビルの植栽・管理を行った。

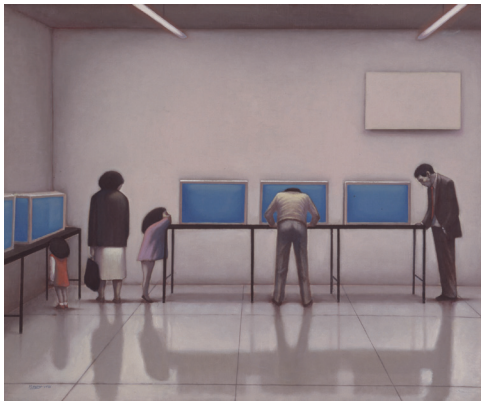
1988 年、新国立劇場建設のため官民一体となった都市開発事業が開始され、寺田は所有していた土地を提供し、本プロジェクトに唯一の個人として参画する。行政が掲げた文化施設を設置するプランに賛同したうえで、美術館創設（現在の東京オペラシティアートギャラリー）を提案し、私財を投じて美術館創設に向けて収集活動を開始した。

2018（平成 30）年 11 月 18 日、逝去。

展示構成

1章　人間この未知なるもの

寺田コレクションを俯瞰すると人の姿かたちを主題とした作品が多く収集されていることがわかる。人間存在への飽くなき探究心が寺田を突き動かしていたのだろう。寺田コレクションの中の人物像には、作家による深い洞察のもと導き出された人間のあらゆる側面が垣間見える。また寺田コレクションの中でも、都市生活者をはじめとした人間社会のあり様を描く相笠昌義の作品群は充実した質と量を有しており、寺田は人間を冷静に捉える中にもあたたかみのある画家のまなざしにひかれていた。まずは多様な人物表現を紹介することで、寺田が生涯を通して深い洞察を重ねた「人間とは何か」という命題をあらためて問い直したい。


相笠昌義　《水族館にて》1976 年

舟越保武《ダミアンの手》1977 年

2章　幻想美術 見えないものとの対話

寺田は、不可視の世界や神秘的現象を表現した作品群を「幻想美術」と名付けて収集した。敗戦を経験してリアルな現象が存在している手応えがなくなったという背景もあり、寺田コレクションには現実世界へ向けられた批判的精神が色濃く反映されたことがうかがえる。また精神性の高い作品群は寺田にとって人間の内面に接近する手段であった。寺田は「幻想美術」を目に見えない単なる想像として切り離すのではなく、現実にある存在そのものを問い、物事の根源に迫ることが可能な一つの世界と捉えていた。そして視覚芸術が不可視の存在に“かたち”を与え、目に見える世界の内側にある隠された真実を浮かび上がらせることを確信していたのである。

川口起美雄《柔らかな隕石》1993 年

荒木高子《聖書》1982 年頃

展示構成

3章　自然の声 未来のアニミズム

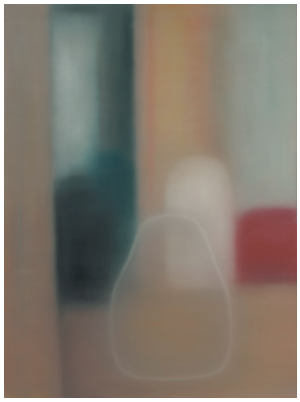
寺田は幼少期より虫や野鳥などの動植物と親密に触れ合い、樹木と共に生を歩んできた。あらゆる生き物の中で人間が特別な存在なのではなく、生態系全体の一部に過ぎないと自覚し、あらゆる生き物の命は等価であると考えた。造園の仕事においては、目で見るだけでなく自身の手で土や石や草花に触れることで、視覚では捉えられない「自然の声」を聞き、自然の内に秘められたエネルギーを感じ取り、配置して然るべき場所を見通して庭づくりを行っていた。こうしたプロセスは、コレクションにも応用され「作品との対話」へと昇華された。人間の営みと自然とを完全に切り離さず、むしろ一体になるものと考える寺田の自然観は、有機物から無機物までに「やおよろずの神」が宿り、人間以外の存在にも霊魂の存在を認める古来日本のアニミズムへ接近しているように思われる。ここに集う作家たちもまた人間以外の存在へ見るものの意識を促し、作品に内包された生命は目に見えずとも確かな実感となって立ち現れている。

富田菜摘《幸之助》2017 年

4章　センス・オブ・ワンダー 最後の希望

最晩年、寺田は自然破壊と化学薬品の乱用に警鐘を鳴らした『沈黙の春』の著者、レイチェル・カーソンによる遺作『センス・オブ・ワンダー』を愛読し、自身の思いを代弁するものとして周囲の人々へ贈呈していた。「センス・オブ・ワンダー」とは自然の神秘や不思議さに目を見張る感性を表す言葉で、本書では子どものように澄み切ったまなざしで世界を見つめ、美しいものを美しいと素直に享受する瑞々しい感性を持ち続けることの大切さが説かれている。本展最終章では、寺田独自の自然観と「創造的な営み」というべき収集活動との連関から、寺田が未来へ託そうとしたメッセージに思いを馳せていきたい。

天野純治《Field of water ／風の領域 #017025》2001 年



堀込幸枝《At room》2017 年

本展の見どころ－前編「起源」後編「継承」を通して

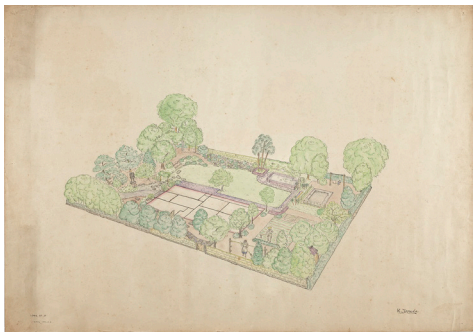
1　コレクターの知られざる一面
造園家としての仕事を紹介。

寺田は芸術作品を集める活動を、「庭づくり」の延長にある「創造的な営み」であると表しました。本展では、寺田が美術品収集を始める以前から、造園家の仕事に従事してきた経歴に着目します。初公開となる寺田直筆の庭園見取り図や寺田が関わった庭園写真などをご紹介し、寺田独自の自然観と収集活動との連関を探ります。

コレクションは造園と同じで、
既存の物を集めたり組み合わせていくことで新しい世界を創り出していく。
コレクションするということも創造的な営みではないかと思います。
（寺田小太郎）

出典：「ひと　東京オペラシティアートギャラリー名誉館長 寺田小太郎さん」『月刊美術』290 号、サン・アート、1999 年 11 月、p.107

T 邸庭園　施工：綜合庭園研究室　撮影：杉山薫



10.「東京農業大学在学時の寺田小太郎による庭園見取り図」 1946 年

2　「表現行為 / 創造としての収集活動」とは？

寺田は生前、コレクションという行為そのものを「創造／表現行為としての収集活動」として捉え、自身の美術コレクションを多くの人々の鑑賞に供し、作品鑑賞を通して見る人と共に思考を巡らせることを願いました。寺田コレクションは、時に開かれたオープンエンドな問いかけとして、社会・そして未来へ向けられました。社会全体が様々な課題を抱え未来を見据える結節点にある今、私たちはあらためて人間にとって普遍的な価値とは何かを問い直す必要に迫られています。寺田コレクションは、人の心を満たす豊かな社会を創りあげる手段としての芸術と、「コレクション」という営みの可能性について新たなる地平を拓いてくれるでしょう。

3　現代における「個人コレクター」の
社会的役割を再考。

Series: コレクターズ /Collectors
「収集」の域を超えて芸術との関わりを生み、自らの志を波動として周囲へ影響を与えるような「コレクター」たちがいます。作家を支えつつ社会へ芸術の息吹を送る彼らは、将来アートシーンで活躍するであろう美術大学の学生にとっても重要な存在といえるでしょう。本シリーズでは、作品収集の背景にあるコレクターのまなざしや個人のライフストーリーを辿りながら、収集という行為そのものが社会をより充実させるための営みであると捉えることで、「社会におけるコレクターが果たす役割」を再考します。本展はその第 2 回目です。

関連イベント

●ゲスト・トーク

「記憶の中の寺田さん」

10 月 10 日（日）14:00 ～

府中市美術館館長 藪野健氏×多摩美術大学美術館館長 鶴岡真弓

※事前申し込み制

●キュレーターズ・トーク

●キュレーターズ・トーク

企画担当者による展示解説です。

11 月 6 日（土）14:00 ～

※事前申し込み不要　当日会場にて受付

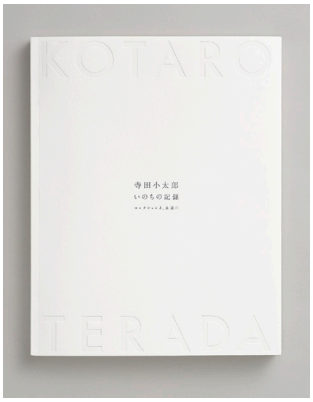
会場：多摩美術大学美術館　B1 多目的室
参加費：無料（ただし、入館料が必要です）
各回＝定員 20 名（定員に達し次第受付終了）
事前申し込みが必要なイベントにつきましては、当館 HP よりお申し込みください。

新型コロナウイルス感染拡大を受け、関連イベントの実施方法を変更させていただくこととなりました。
多摩美術大学美術館 YouTube チャンネルにてアーカイブ動画を配信予定です。
公開日時につきましては、Twitter、ホームページ等で後日発表させて頂きます。

展覧会カタログ

『寺田小太郎　いのちの記録　－コレクションよ、永遠に』
2021 年 7 月 10 日刊行／ 24.0 × 18.7cm ／ 272 ページ
一般：2500 円　学生：2000 円（税込）

本展作品図版約 190 点掲載。寺田小太郎による随筆『わが山河』（私家版）を再録掲載するほか、生前の寺田と親交を結んだ 2 人の画家相笠昌義・奥山民枝、造園家・中島健主宰の綜合庭園研究室 OB へのインタビュー、多摩美術大学美術館館長・鶴岡真弓の書き下ろしテキストなどを収録。



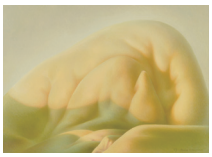
画像請求書

広報用図版として10点をご用意しております。画像掲載をご希望のかたは必要事項をご記入の上、画像番号に◯をつけて、FAX またはメールにてお送りください。

【諸注意】
①掲載時は作家名・タイトル・フォトクレジット等を必ず表記ください。トリミング、文字載せはお控えください。
②記事をご掲載いただく場合には、情報確認のため校正原稿をお送りください。
③アーカイヴのため、掲載誌（紙）、URL 等をお送りいただけますと幸いです。
以上、ご理解・ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

1

相笠昌義《トップルームの寺田さん》1999 年
油彩、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：武藤滋生

2

奥山民枝《山照》1983 年
油彩、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：早川宏一

3

相笠昌義《水族館にて》1976 年
油彩、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：斉藤新

4

舟越保武　《ダミアンの手》1977 年
ブロンズ
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：若林亮二

5

川口起美雄《柔らかな隕石》1993 年
テンペラ、油彩、板
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：斉藤新

6

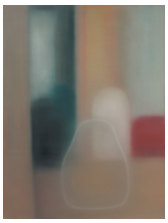
荒木高子《聖書》1982 年頃
陶
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：斉藤新

7

富田菜摘《幸之助》2017 年
金属廃材、ミクストメディア
多摩美術大学美術館蔵
撮影：若林亮二

8

天野純治
《Field of water ／風の領域 #017025》
2001 年
シルクスクリーン、ステンシル
多摩美術大学美術館蔵
撮影：若林亮二

9

堀込幸枝《At room》2017 年
油彩、キャンバス
多摩美術大学美術館蔵
撮影：若林亮二

10

「東京農業大学在学時の寺田小太郎による
庭園見取り図」
1946 年
個人蔵
撮影：若林亮二

媒体名：
発売・掲載・放映日：
御社名（ご担当者名）：
E メールアドレス：
ご連絡先（電話・E-mail）：

お問い合わせ：
担当学芸員　渡辺眞弓
E-mail：museum@tamabi.ac.jp
TEL：042-357-1251
FAX：042-357-1252